

沿いの教育メートルに限られるので、以前は誰かが森の中に持ち込んで植え、それがそこでだけで増えたものと思われる。

このような例は他にもあり、かつて薬草関係者などにより、播種が行われたことを示すものと考えている。

帰化植物には次のようなものがある。

ハルガヤ、タイスビユ、ニマゼキシヨウ、セリバオウレン、ワスレナグサ、ハルザキヤマガラシ、キレハインガラシ、ヘビイチゴ、ムラサキウマゴヤシ、イタチハギ、タチオランダゲンゲ、ノランジン、ユウゼンギク、アメリカセンダングサ、タウコギ、アメリカオニアザミ、キクニガナ、コウリントンボボ、トゲチシャ、アラゲハンゴウソウ、セイタカアワダチソウ、ブタナなどである。

これらは森の変化につれて盛衰、交代を繰り返し、構成種に変化を見せている。

例えば、中央線沿いの耕作放棄地などに集中的に広がっていたセイタカアワダチソウやユウゼンギクなどは、耕作放棄地に植林が進むにつれて、少なくなり、森の全体の林道に拡散し、目溜りにおしやられている。ユウゼンギクの合間に咲いていたギンセンカの姿は見えなくなっている。

こんごも、それぞれ増減を繰り返しながら新しい種の侵入や消失を含む変化を重ねていくにちがいない。

ほとんどの外来植物は、伐採地、耕作地、林道沿い、園地や施設周囲の人工的なところに進入しているが、セリバオウレンは天然林の真ただ中に生育している。明治か大正時代に、薬草業者が林内に種を撒いたものがすっかりと土着したもののようで面積は少ないが、いかにも自然な感じで株床を構成しており、歴史的な意味でも貴重な存在となっている。

5. チェックリストの作成と利用に向けて

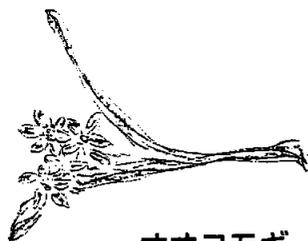
しかるべきリストを作成し、リストの一つひとつを点検し、その後のフォローすると、貴重、希少な植物なども浮かび上がってくる。

そこで、まだ大ざっぱながら、野幌での、最近までの全ての高等植物をリストアップしてみるのと、植栽木を含め、739種となり、以上のような

ことが解ってきた。

このリストは、変種、品種のわけ方などによって、また、情報提供者の信頼性などによって変わり、十分な点検が必要であるが、これから様々な活用が可能である。

リストの信頼性を高め、リストによって植物の勉強の効率を高めたり、保護や観察などへの活用をみんなで作って行きたいと考えている。皆さん、御一緒に野幌の植物の行方を探ってみませんか。



オオヨモギ

國 兼 治 徳

ヨモギは草餅の材料として古くから使われている山菜である。

私が育った家でも祖母が春にヨモギを摘み、湯がいてザルに干すのが常だった。その頃は、年一回暮れの5日頃に餅搗きをした。鏡餅に始まり、あん餅・豆餅・切り餅そして草餅を搗いた。草餅を作る時は、まず乾燥したヨモギを水でもどし、セイロの糯米の上に置いて一緒に蒸した。あせた草色だが、ヨモギの匂いは搗いている間もただよった。草餅はヨモギ餅とも云う。

父は餅好きで三度の飯が餅でも飽きないふうだった。父は一生の中で大病に罹ったことが何度かある。最初は若い時のおできの手術である。父の話や残された記録をもとに想像するしかないが、幼い父は麻酔なしに押えられて左大腿部の卵大のできものを取り出されたという。想像するだけで身震いする。あとの病気は私の記憶にもあり、アキレス腱の切断、結核と70代後半の強度の下痢である。特にこの下痢は頑固で、市立病院に入院しても止まらず、食物を口にするとまたたく間に排泄してしまった。医者も手のくたしようがなく、父はやせる一方で点滴でかろうじてもっていた。

さすがに、これで人生の幕を閉じると思ったのだらう。大学ノートにかなり大きな字体で、

「胃は胃の働きをなさず、腸は腸の働きをなさず、ザ・エンドである。」

と、書いてあった。又、別のページに私宛に、「お前は私にないものを持っている。大事に生きろよ。後は頼む。」

と、あった。父はどうせ死ぬのなら好きなものを食べて死にたい。餅を食べたいと云いだした。私達もあるいは駄目かもしれないから、好きなようにさせてやろう、と餅を食べさせることにした。父が餅を食べた時に居合せなかったが、美味しいうまいと云いながら食べたそうである。ところが下痢するはずの餅がくだらない。逆に止まってしまった、どうなっているのか、医者に話をすると首をかしげるだけで言葉もない。今度は病院食でも下痢をしなくなった。あれほど頑固な下痢が止まってしまったのである。7月下旬の話であった。

お盆に入り、我が家は8月13日にお墓参りをすることに決めている。父に代り墓参をすまて、お寺の納骨堂をお参りする前に病院へ寄ったら、父は服を着て待っていた。無理だから私達でお参りすると止めたがきくものではない。云い出したらきかない性格なので連れていくことにした。只、何となく以前の父と違って様子がおかしい。病後であり、年齢も80才に近いので多少痴呆化したかもしれないと思い、サポートしながらお参りをすませ病院にもどった。

父はその後完全に快復し、意識もすっかり元通りになって更に10年以上も長生きし、89才で亡くなった。父の場合、餅の何がよかったのかわからずじまいである。すでに治るようになってきたところに、餅がきっかけになったのかも知れないが、父は勿論のこと私達も餅が父を救ったと真面目に信じている。

私も父に似て餅が好きだ。従って我が家では昔と違って年に何回か餅を搗く、搗くと表現したが、「餅っ子」という電動の機器で作るのであるから、正確に云うと搗くではない。特に我が家では年の暮れ以外は殆ど草餅を搗く。そのため家内は毎年春先にヨモギを摘む。そして重曹を少し加えてゆで、灰だしをしたヨモギの塊りを冷凍庫に入れて

おく。この方法によると緑があせないし、匂いも消えない。更に蒸す時ヨモギを始めから加えずに、蒸しあがる寸前に加えた方が色があざやかである。そのためか我が家の草餅は好評である。知人の中には、お歳暮の代わりに草餅が欲しいと名指しである。

道内でヨモギとつく植物は十指を越えるが、草餅に使うヨモギは、*Artemisia montana* オオヨモギである。*A. princeps* ヨモギは分布していないようである。ヨモギ属は多方面に利用され、回虫駆除薬のサントニンもミブヨモギから製成するし、お灸のモグサもヨモギからとる。

牧野富太郎先生によると、ヨモギの語源は不明とある。又、中村浩先生は、ヨモギは「よく萌える草」つまり「善萌草」(ヨモギ)ではないかと述べている。漢和辞典には「艾」(ガイ)、「蒿」(コウ)、「蓬」(ホウ)、「蕭」(ショウ)の4字の字義がいずれもヨモギである。このうち、「蕭」はカワラヨモギと出ている辞典もあるのではぶくとして、牧野先生は「蓬」はヨモギではなく、アカザ科の植物で一種を指すのではないとしている。先生は漢名「艾」がヨモギとされている。「艾」はモグサでもあるから決められたのであろう。

実は中国高等植物□□(図鑑?)には、*Artemisia* はすべて「蒿」を用いている。ちなみにオトコヨモギは「牡蒿」、ヒメヨモギは「矮蒿」である。

そうすると、ヨモギの漢字は「艾」か「蒿」か私の手におえるしろものではなくなる。漢字は表意文字であるから、一字一字に意味があり、「艾」、「蒿」それぞれの語源があるはずである

中国の図鑑には *Artemisia* 属だけで48種、平凡社の「日本の野生植物」には31種が記載されている。これは *forma.subsp* を除いた数字である。

そのうち日中に共通の種は6種である。しかし、平凡社の図鑑の分布からは11種が共通していることになっている。分布は変ることがあるから、一つの目安である。オオヨモギは中国に分布していないことになっているが、ヨモギの方は共通である。一体、中国にヨモギを使った草餅があるだろうか。